

るはといふに、物もいはでみすをもたげて、そよろときしいるゝはぐれ竹のえだ成けり、おいこのきみにこそといひたるをき、て、いざやこれ殿上にゆきてかたらんとて、中將新中將六位どもなど有けるはいぬ、頭弁はとまり給ひて、あやしくいぬる物どもかな、おまへの竹ををりて歌よまんと玄つるを、玄きにまいりて、おなじくは女房などよび出てをといひてきつるを、ぐれ竹の名をいととくいはれて、いぬるこそおかしけれ、たれがをしへを玄りて、人のなべて玄るべくもあらぬ事をばいふぞなどのたまへば、竹の名とも玄らぬ物を、なまねたしとやおぼしつらんといへば、まことぞえ玄らじなどの給ふ、まめごとなどいひあはせてゐ給へるに、此君とせうすといふ詩をすして、又あつまりきたれば、殿上にていひきしつるほいもなくてはなど、かへり給ひぬるぞ、いとあやしくこそありつれとの給へば、さる事には何のいらへをかせん、いと中々ならん殿上にてもいひの、玄りつれば、うへ條（うへじょう）もきこしめして、興せさせ給ひつるとかたる、〔徒然草下〕吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし、御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植られたるは吳竹なり、

〔閑窓自語〕同帝町○櫻被爲造竹臺事

寛政の内裏には、中殿のまへにかは竹くれたけ、かげをならべてたてられしはわたりぬ、

〔倭名類聚抄二十〕〔竹〕 箍竹 四聲字苑云、音興苦同、辨色立成云、苦竹加波多計本、竹名也。

〔撮壤集中〕〔竹〕 箍竹

〔大和本草九〕〔竹〕 女竹 淡竹苦竹ノ内ニ雌雄アリ、其雌竹ニハアラズ、國俗ニ女竹ト云テ葉モ身モカ

ハレルアリ、大竹トナラズ、皮ヲチズ、故ニ皮竹ト云、又苦竹ト云、筍ノ味苦キ故ナリ、吳竹ノ漢名苦竹ト云トハ別也、吉田兼好ガ曰、吳竹ハ葉細ク皮竹ハ葉廣シト云ヘリ、又小ナルヲバ篠竹ト云、女竹ニ二種アリ、節高下節低トナリ、筍ノ味苦クシテ吳竹ニ甚ヲトル、壁ノ材トシ簣竹ニ用ヒ、魚筍